

お茶の水大 中村洋子

目的：思春期の子供の自己形成の過程を取り上げ、この時期特有の思考・行動（例えば反抗のように既成の関係をそのまま受け継ぐのではなく、新しい関係をつくる動き）の一つとして“日常を超える体験”に着目し、親子関係においてそれがどのようにあらわれ、その体験によって、新たにどのような関係状況が構築されるかについて考究する。

方法：思春期の子供達自身による日常を超える体験の具体例をインタビュー・質問紙（T高校 1・2年生）により明らかにする（“タバコを吸う” “パーマをかける等”）・またそこにおこる親子関係の変化を、1988～1994年 お茶大 心理劇研究会、女性と家族をめぐる人間関係を考える会 他 で行われた心理劇“二人の会話”等で分析する。・結果を分析・考察するにあたっては参加観察法・フィールドワークによる資料（母親体験）も参考にする。

結果及び考察：1.従来の日常の体験を積み重ねつつ、既存の関係を壊したり、回避する等、思春期に 日常を超える体験をすることによって、自己・他者・状況のそれぞれの多面性に気付く。2.それを受け止め、その対応（かかわり方）を子供自身が学んでいく。さらに、その過程で、日常と非日常との違いを比較し、現存する価値観を検証（確認）することができる。3.これらのことが、日常の問題状況を超えて家族関係を再構築していくことにつながる。